

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2014 春号 **66**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡発掘調査



調査区1 全景 (西から)

特集 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館発掘調査



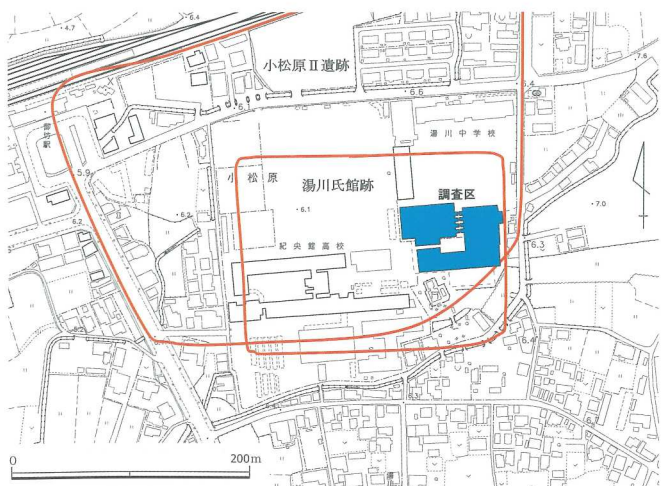
遺跡遠景（南東から）

小松原Ⅱ遺跡（24）は、御坊市湯川町小松原に所在する縄文時代後期・弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、JR御坊駅から紀央館高校・湯川中学校にかけて展開

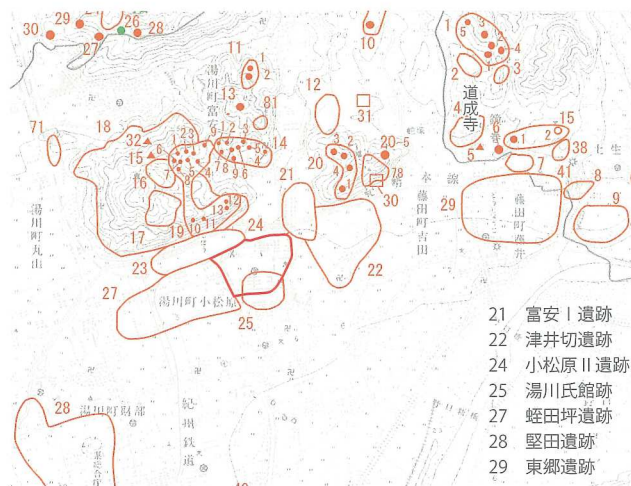
しています。周辺には多くの遺跡が残されており、江戸時代になり日高別院の周りに寺内町が形成されるまでは、各期を通じて日高地方の中心地として栄えたところです。

湯川氏館跡（25）は小松原Ⅱ遺跡の一面にあり、室町幕府の奉公衆ほうこうしゅうで、日高地方を拠点に有田・牟婁地方に影響を及ぼした湯川宗家の館跡です。湯川町の町名は湯川氏に由来するもので、紀央館高校の校名も、湯川氏館の跡地に築かれていることによるものです。

発掘調査は湯川中学校改築工事に伴うもので、御坊市の委託を受けて平成25年6月から12月にかけて面積3,787㎡を対象に実施しました。調査区は体育館部分の調査区1と校舎部分の調査区2に分かれ、弥生時代、奈良時代、鎌倉時代、室町時代の遺構・遺物がみつかりました。

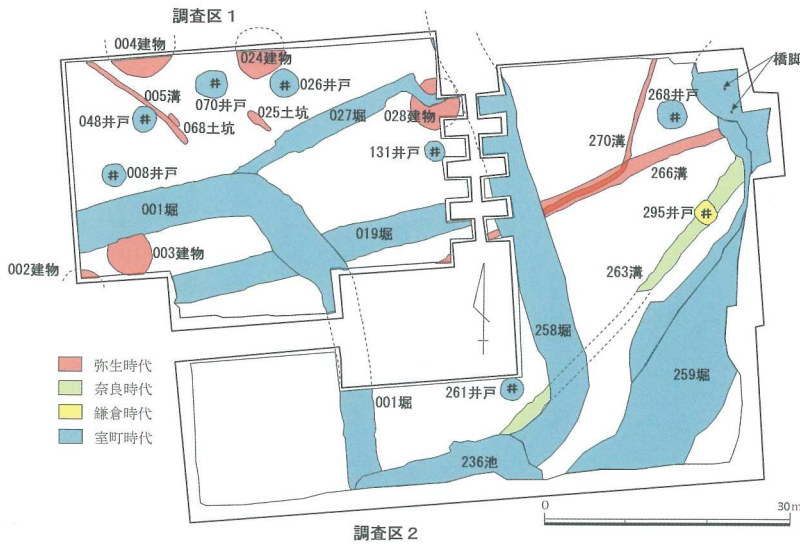


調査区位置図



周辺の遺跡

- 21 富安Ⅰ遺跡
- 22 津井切遺跡
- 24 小松原Ⅱ遺跡
- 25 湯川氏館跡
- 27 蛭田坪遺跡
- 28 堅田遺跡
- 29 東郷遺跡



検出した主要遺構

弥生時代の遺構はすべて中期のもので、
 竪穴建物5棟・溝3条・土器棺墓1基・土
 坑などがあります。竪穴建物はすべて調査
 区1みつかっていますが、すぐ北側でも以
 前に1棟確認されています。調査区2でみ
 つかっている266・270溝を境に南東
 側では弥生時代の遺構がほとんど存在しな
 いことから、これらは集落の内外を区画す



003 建物 (弥生時代中期)

る溝の可能性ががあります。
 竪穴建物のうち、024建物は火災で焼
 けています。残りは良くないものの、炭化
 した垂木や柱材の上に焼土が認められたこ
 とから、屋根の上を土で覆っていた可能性
 もあります。また、炭化木や焼土の上に土
 器が数個体伏せられた状態で出土している
 ことから、焼失した後に、おまつりをした



軒丸瓦 (白鳳時代)

と考えることもできます。
 土器棺は、003建物の壁を抉るように
 掘った小さな穴に埋められていました。口
 縁部を打ち欠いた甕に高杯の杯部を被せた
 もので、早世した小児を屋内に埋葬したも
 のと考えられます。
 奈良時代の遺構には263溝があり、須
 恵器や土師器とともに軒丸瓦などが出土し
 ました。軒丸瓦は道成寺創建期の瓦と同形
 式ですが、周辺では以前から古代の瓦が出
 土していることから、白鳳時代に遡る寺
 院が小松原Ⅱ遺跡付近にあったと判断でき
 ます。また、この寺は、「日本靈異記」に
 登場する「別寺」の可能性ががあります。



295 井戸（鎌倉時代）



259 堀断面（室町時代）

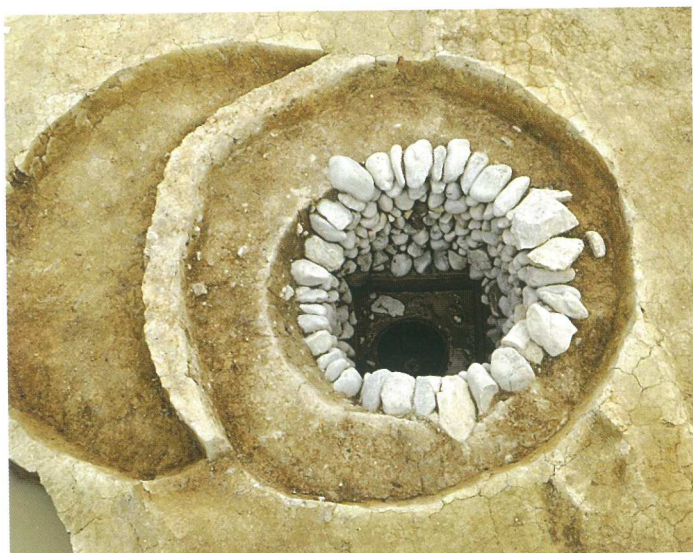
鎌倉時代の遺構には、板を方形に組んだ295井戸があります。この時期の遺物は、調査区南東部の谷状遺構から土器類や角塔婆などの木製品が多く出土しています。以前にも紀央館高校の敷地から同じ時期の土器が、仏教関係の遺物とともに多量にみつかったことから、鎌倉時代にも付近にお寺が存在したことが窺えます。ただ、周辺部で平安時代の遺物がほとんどみつかった

ていないことから、白鳳時代から続くお寺ではないと考えられます。室町時代の遺構には、堀（溝）5条・井戸7基・池などがあり、すべて湯川氏館に關係すると考えられます。また、堀・井戸は、すべてが併存するものではなく、少なくとも3時期を想定することができ、館の改修などに伴って埋戻しや掘削を行っているかと判断できます。

調査区2の東でみつかった259堀は、幅11m、深さ約2mで、規模から館東を区切る外堀であると考えられます。調査区北東部では堀がCの字状に湾入しています。東部では堀が調査区外であることから全容は明らかではありません。ただ、この湾入した部分の堀底には橋脚と考えられる2本の柱があり、館への入口に架けられた橋が存在したと考えられます。

001堀は幅4〜6m、深さ0.8〜1.2mあり、調査区内で屈曲して南側は236池に繋がります。この池は調査区南隣に鎮座する湯川神社の社殿前の池と繋がるものと想定でき、その続きが紀央館高校の調査でもみつかっています。おそらく社殿が築かれていたと巡るように池が掘削されていたと考えられ、館の庭園の池泉であったと想定できます。また、001堀の続きは、紀央館高校の敷地でも3箇所で見つかっています。それらを繋ぐと、この堀は池の北側にある東西約40m、東西約30mの方形区画を巡っていたと判断できます。

方形区画の北側では、大小の土師器皿が多量に出土し、カワラケを使った儀式をお



008 井戸 (室町時代)

こなっていたと考えられます。また、池に近い南側では、輸入陶磁器などの高級品がセツトで多量に出土し、饗宴がおこなわれていたと考えられます。この一画が庭園と考えられる池に面していることから、方形区画周辺に主殿や会所かいしよが存在した可能性があります。

室町時代の井戸には、井戸側が石積みものが6基あります。このうち008井戸は、底付近に方形枠を設けて、その中央に



曲物を据えていました。また、桶状の井戸側をもつ070井戸は、底に方形枠を設けて、その中央に桶を据えていました。遺物は土器類や瓦類のほか木製品なども多く出土し、館内での生活を窺うことができます。木製品のなかには焼けて炭化したものもあり、焼けた瓦や焼土なども出土しています。このことから、館は焼失していることが窺え、これは文書資料などから明

らかなっている天正十三年(1585)の羽柴秀吉の紀州攻めに係るもので、同時に館は廃絶したと考えられます。今回、湯川氏館の東側を区画する堀がみつかり、以前からの調査成果を含めて判断すると、館は東西約225m、南北約200mの規模で、各地の守護館に匹敵する規模をもつことが分かりました。

(川崎雅史)

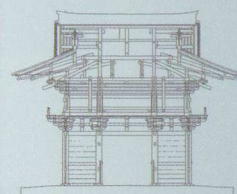


上段：焼けた柱材 (236 池出土・室町時代)

中段：扇骨 (131 井戸出土・室町時代)

下段：小柄 (131 井戸出土・室町時代)

片面に「大福浪介」の銘あり



琴ノ浦温山荘の保存修理

「新田の別荘」として親しみある海南市の琴ノ浦温山荘は、工業ベルト製造業で大成した新田長次郎氏（現ニッタ（株）創業者）により大正年間にあつて造営された。池の護岸に擬石などを用いた庭園は国の名勝に、園内の主要な建物も重要文化財に指定されています。

今回の保存修理事業では、浜座敷を中心に、正門と北冠木門の計三棟の修理を行う計画で、平成二十五年六月に着手し、同二十六年十二月の完成を目指して進めています。

浜座敷は、矢ノ島と呼ばれる岩山の斜面に「懸造り」状に建つ、大正二年（一九一三）建立の建物です。主屋（同五年、一九一六）や茶室（同九年、一九二〇）に先駆けて建てられた、園内でも最初期の建築です。小屋組の部材からは建立時期の墨書も確認されました（写真3）。母材を中心とした伝統的な外観ですが、天井板には合板を、小屋



写真1 修理前の浜座敷を東より望む



写真2 浜座敷室内「十畳」を北より見通す



写真3 屋根下地材で確認された建立時期の墨書「大正貳年拾二月四日之板打ツ」

組にはトラスを用いる等、当時の新しい技術も取り入れています。瓦の文様は古代風の意匠を採用しています。かつては室内から黒江湾が一望でき、海側には船着き場を備えるなど、園内でも特徴的な建物です。海に面した立地のため、建築から百年の間に台風の影響を幾度も受けて来ていますが、屋根面全ての瓦を葺き替えるのは今回が初めてでした。瓦の形状がきわめて均一なこと、瓦の大半を銅釘で固定していたこと、いずれも強風によって瓦が動かないようにと

の工夫ですが、その賜物と言えらるでしょう。塩害により触ると崩れてしまう程に劣化した瓦も多い中で、葺き土や屋根下地材はおむね健全な状態が保たれていました。調査の中で、浜座敷は奈良の東大寺三堂（法華堂）を模して建てられたことが判つて来ました。入母屋屋根側面の「妻飾り」や鬼瓦、軒先瓦の意匠など、外観を中心に似た部分が確認できます。それらも含めて、今後も修理の経過をこの紙面で紹介していきます。 （下津健太郎）

『日本室』想像こそつきますが、なんとも不思議なひびき。実は新宮市の重要文化財・旧西村家住宅に設けられた和室の名です。文化学院の創設者としても知られる西村伊作によって大正3年に建てられた洋館は、単なる個人住宅の枠を超え、あらたな生活様式を提案する夢に満ちあふれた建物です。

総2階建の1階には、庭に面して健やかな居間や食堂が配され、モダンな家族本位の生活がデザインされます。洋間の寝室が設けられた2階には、お湯の出るシャワー（地下から手動のポンプでくみ上げさせて！）まで整えられた浴室が奢られているものの、その2階の片隅に、取ってつけたような棹縁天井や床の間がついた小さな『日本座敷』が配されていることは、まるで現代の住宅のありようを予見したかのようで、時間が逆回転するような既視感が漂います。

しかし、この先には少々の違和感が。浴室前の『子供寝室』とその隣の『日本室』は、漆喰塗の天井に大壁、その上瀟洒な上げ下げ式窓やガス灯が仕込まれるなど、全く洋風のしつらえです。しかし床には畳が！決して当初の計画を無視した改造ではなく、伊作自身が自著で語っているのです。日本人が椅子式の生活になじむには、段階が必要だと。そう言われれば、わが家でもリビングに置いたソファーにはだれも腰掛けず、わざわざその前の床に座ったり寝転んだりと勝手きままにくつろいでいます。

文化的な生活には、まだまだ道は険しそうです。

(多井 忠嗣)



愛らしい青壁の『子供寝室』
まるで古い童話の世界のよふ

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

発掘屋余話 ②5 はにゅう

むかし、子どもの頃、姉が歌っていた唱歌「埴生の宿」の埴生（はにゅう）の意味がわかりませんでした。さすがに長じて万葉集などでお目にかかる機会があり、土の雅語、転じて粗末という意だとなった次第。もともと埴生の「埴」は土、それも粘土質の土をさす漢字ですね。その「埴」で輪状につくったものが考古学でいうところの「埴輪」、あの古墳の周囲に飾り立てられていた器物ですね。

埴輪といえはつい最近、当センターで調査をしている和歌山市内の平井遺跡でその窯跡が見つかり話題になりました。

全国的に見ればいくつも見つかっており、たとえば関東では埼玉県鴻巣市の生田塚埴輪窯跡群、関西では大阪府高槻市の新池埴輪製作遺跡が有名ですね。前者はその供給先が直線距離で100 km近くもはなれた千葉県原市の古墳にまでおよんでいたこと、後者は近くに所在する継体天皇のお墓と考えられている今城塚古墳との関連が着目されていることでも知られています。

今回見つかった窯跡は二基ですが、和歌山県内でははじめてのことです。円筒埴輪以外にも家形や馬・人物などの形象埴輪と称される一群も少なからずあるようです。詳しくは今後の整理作業を経た上での結論になるでしょうが、その過程で製作技法のこまかな解明がすすめば、工人集団のかかわりから他地域との関連がわかるかもしれませぬ。また、科学的な胎土分析をおこなえば、供給先の古墳が特定される可能性もじゅうぶんにあります。

いづれにしても和歌山の古墳を考える上で貴重な資料と言えるでしょうし、その意味では、久々のヒット、大きな成果を得た調査であったと自負しています。

なお冒頭、「はにゅう」とは粗末なことの意だと書きましたが、現在はちがいますよ。最近では、はにゅうといえはもちろぬ「金」のことです。ウソです。

(村田 弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2013年冬～2014年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「岩橋千塚発掘 50年」 2014年 3月 1日(土) ～ 6月15日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展 新収蔵品展 2014年 3月 8日(土) ～ 4月20日(日)

高野山霊宝館

- 冬季平常展「密教の美術」(後期) 2014年 2月 24日(月) ～ 4月20日(日)
- 春期企画展「火災と高野山 - よみがえるその歴史と暮らし」
2014年 4月 26日(土) ～ 7月13日(日)



掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 調査区1全景 (西から)
- 2 特集 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館発掘調査
- 6 文化財建造物課短信
- 7 きのかに歴史小話「古建築修理の逸話 ⑧ 日本室」
「発掘屋余話 ⑫ はにゅう」
- 8 催し物案内

風車66 (2014・春号)

平成 26年 3月 31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8404 和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843 FAX 073-425-4595

maizou-1@wabunse.or.jp